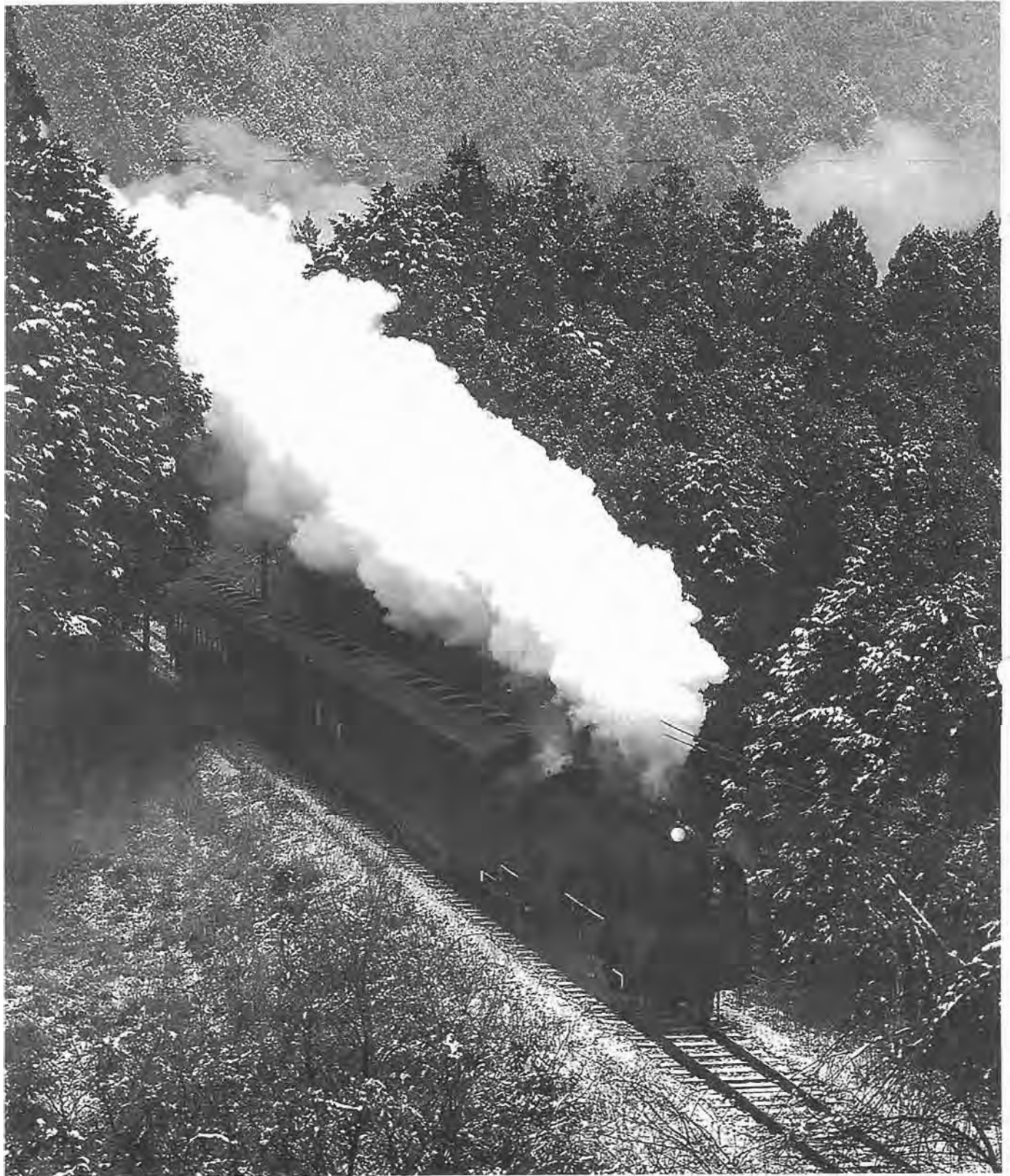


中川根ふる里通信

= 第73号 =

中川根ふる里通信
 昭和61年4月20日創刊
 編集・発行・連絡先
 〒429-0213
 静岡県榛原郡中川根町
 TEL0547-58-0015 上長尾859-6
 郵便振替口座00870-4-81556



新雪の大井川鉄道 笹間渡、地名間を走るSL。(地名駅手前)



初春のお喜びを申し上げます

申年(さる)から酉年(とり)へバトンタッチされました。災(わざ)の年は彼方にさって、幸福の鳥が羽(は)はたいて来ることを祈(いの)りたいですね。

それにしては昨年は自然災害が極端に多く発生しました。春先からの台風(たいふう)の発生、最終は十二月初旬迄、その数四十に届くほどで、三分の一は日本列島を通過し、各所に被害をもたらし、テレビ、新聞等(こう)あまりの惨事(さんじ)に心身(しんしん)が釘(くわ)づけられる思い(おも)いでした。ふり返(かえ)ってみますと、

⑧八月の終りの大潮(おほしほ)と、台風(たいふう)接近(きんせき)と満潮(まんしほ)時(とき)が重な(かさ)った時の高潮(こうしほ)のものす(こと)。

⑨長時間(なが時間)豪雨(ごうう)に見舞(みま)われた地域(ちいき)の土砂(どさ)災害(さいがい)、今年(ことし)は、三重(みえ)県(けん)、徳島(とくしま)県(けん)、高知(こうち)県(けん)あたり(あたり)に、集(あ)集的(てき)に雨雲(あまぐも)がおよ(よ)せ、大洪水(おほいづみ)とな(な)った事(こと)。その地(ち)予測(よそく)のつ(つ)かない浸水(しみず)、洪水(こうずい)被害(ひがい)。

⑩強風(きやうふう)による被害(ひがい)も驚(おどろ)くは(は)みり、あち(あち)こ(こ)ち(ち)で風速(かぜのすみ)50m。街路(まちかど)樹(き)は根(ね)こ(こ)そ(そ)ぎ(ぎ)倒(た)れ、台風(たいふう)の直撃(ちくげき)を受(う)けた伊豆半島(いずはんとう)の壊滅(くわいめつ)ぶり(ぶり)もあ(あ)った。東北(とうほく)から中国(ちゆうごく)地方(ちほう)日本海側(にっぽんかいがわ)も強風(きやうふう)により(よ)り、

「中川根(なかつがね)ぶる里(さと)通信(つうしん)」の表紙(ひたひた)文字(もじ)は、文次(ぶんじ)出身(しゅしん)の書家(しょか)柿下(かきした)木冠(きくわん)さんが書(か)いて下(くだ)さ(さ)って(と)りま(ま)す。様々(さまざま)な皆(みな)さん(さん)が「いい字(じ)だ」と喜(よろこ)んで(で)くれます。

昨年(こぞ)秋(あき)柿下(かきした)さん(さん)より、松竹梅(しょうちくばい)の書(か)を(を)いた(た)だ(だ)き(き)ま(ま)す(す)た。おめ(め)で(で)たい(たい)も(も)の(の)です(す)か(か)ら、年頭(ねんとう)の号(ごう)に(に)か(か)ざ(ざ)り(り)ま(ま)す(す)。(墨(すみ)の濃淡(のうたん)が表(あらわ)せ(せ)な(な)く(く)て、残念(ざんねん)です)

⑪果樹園(くだじゆん)や山(やま)の木(き)の实(み)が大被害(おほひがい)で、熊(くま)の住宅地(たけやま)への出沒原因(しゅつぼつげん)は、雨(あめ)も風(かぜ)もたい(たい)した(した)こ(こ)とは(は)なく、洪水(こうずい)時(とき)も大井川(おおいがわ)の水(みづ)位(くらい)は(は)さ(さ)ほ(ほ)じ(じ)上(あ)が(あ)ら(ら)ず(ず)、ほ(ほと)ん(んど)ど(ど)被害(ひがい)は(は)あ(あ)り(り)ま(ま)せ(せ)ん(ん)で(で)した(した)。

⑫猛暑(もうしょ)の年(とし)、台風(たいふう)の多(おほ)い(い)年(とし)は、歴史的(れきしき)の大(おほ)地震(ちゆじん)が、グ(ぐ)ヒ(ひ)の当(あた)って(と)は(は)な(な)ら(ら)ない(ない)予兆(よせがき)が(が)現実(げんじつ)に(に)な(な)っ(っ)て(て)し(し)ま(ま)った(った)事(こと)にも(にも)本(ほん)当(とう)に(に)驚(おどろ)いて(いて)し(し)ま(ま)い(い)ま(ま)す(す)。

⑬新潟(にがた)・中越(なかつく)地震(ちゆじん)が(が)十月(じゅうがつ)二十三日(にじゅうさんにち)お(お)こ(こ)う(う)て(て)し(し)ま(ま)い(い)ま(ま)す(す)た(た)。

直下型(ちかしたがた)震源(しんげん)地(ち)が(が)深(ふか)さ(さ)10km(きろ)という(いう)条(じょう)件(けん)だ(だ)った(った)ので(ので)、地震(ちゆじん)の規模(きぼ)(マグニチュード)の割(わり)には(は)甚大(しんたい)な(な)被害(ひがい)と(と)なり(なり)、村(むら)全体(しんたい)で(で)非難(ひなん)を(を)余儀(よぎ)なく(なく)さ(さ)れ(れ)たり(たり)、度重(たびかさ)なる(なる)余震(よしん)が(が)さ(さ)ら(ら)に(に)被害(ひがい)を(を)大(おほ)き(き)く(く)たり(たり)、家(いえ)が(が)傷(や)つ(つ)つ(つ)て(て)い(い)る(る)ところ(ところ)への降雪(かようせつ)等(らう)も(も)、当(とう)地(ち)域(いき)は(は)豪雪(ごうせつ)地(ち)域(いき)と(と)い(い)う(う)。

⑭十二月二十六日(じゅうにがつにじゅうろくにち)、インドネシア(いन्दネシア)、スマトラ島(スマトラじま)沖(を)地震(ちゆじん)発(は)生(せい)。

マグニチュード9.0(まぐにちゆうど)の(の)今(いま)迄(まで)に(に)い(い)ない(ない)大(おほ)地震(ちゆじん)。これ(これ)が(が)正(ただ)に(に)歴史的(れきしき)の大(おほ)地震(ちゆじん)で(で)した(した)。そ(そ)して(して)、予想(よそう)さ(さ)れる(れる)東海大(とうかいだい)地震(ちゆじん)は(は)、マグニチュード8.7(まぐにちゆうど)と(と)い(い)う(う)。

いつ(いつ)ころ(ころ)か(か)ら(ら)の(の)誘(よび)ひ(ひ)の(の)た(た)ら(ら)う(う)か(か)、地震(ちゆじん)・雷(かみかみ)・火事(かじ)・親父(おや)・教(しよ)壇(だん)十(じゆ)年(ねん)前(まへ)に(に)、プ(プ)ラ(ラ)ス(ス)台(たい)風(ふう)と(と)なり(なり)、二十世紀(にじゅうせいき)の(の)終(は)り(り)ころ(ころ)には(は)、その(その)

該自体わすれてしまおうほどおだやかな一時がありましたが、十年前の阪神大震災あたりから、火山が噴火したり、大洪水が世界的におこったり、誇復活の感となっています。コンピュータや携帯電話が各家庭の日用品として機能し始めて七年余、機械が頭脳の手伝いとし、指先作業で、書く事も考える事も、買物までやってくれます。電車や駅、人の集まる所の風景もすっかり変わってしまいました。高枝生や若者は携帯電話と対面しています。機械が人の五感(感性)をにぶらせ、将来の日本を荷担う子供達に変化がおきているのではと心配するのは老母心でしょうか。

NHK朝の連続テレビ小説

「わかば」のヒロイン 原田夏希さんは
徳山駅前の原田さんのお孫さんです



1984年 静岡市生まれ。
(父親が中川根町出身)
「わかば」のヒロインに1913人の
中から選ばれる。大学2年生。

現在、NHKで放映中の朝の連続テレビ小説「わかば」のヒロインとして全国から注目されている原田夏希さん。阪神・淡

路大震災で最愛の父を失い、こころに深い傷を負った主人公・高原若葉が、父の志を継いで「神戸の街を緑いっばいにしたい」と造園家をめざして前向きに生きる姿をひたむきに演じています。そのフレッシュな笑顔に、毎朝元気づけられている人も少なくないのでは。

「阪神・淡路大震災で傷ついた家族のこころの再生を成し遂げていく」という難しい役どころに挑戦しているさなかに、新潟県中越地震が発生。防災意識がひとときは高い静岡県で生まれ育った原田さんに、役柄と重なる家族や震災への思いなどについて話していただきました。

問 阪神・淡路大震災から十年目、昨年は新潟中越地震もありましたか……

答 私が生まれ育った静岡は地域性として防災意識が強く、その取り組みも熱心です。地震が起きたときの避難場所や連絡方法も日頃から親や学校から教えられていて、地震の怖さは肝に銘じて感じています。

昨年は地震だけでなく台風も多く、人間の力ではとうしようもない自然の脅威をつくづく実感させられました。新潟県中越地震では多くの方が今も大変な状況に置かれています。被災した当事者を演じて、震災というテーマの重さを改めて感じています。ただ、実際には被災していない私が、頑張ってきたさりと軽々しく言えません。私にできることは何かと考えたとき、震災を乗り越えようと必死で生きている若葉を一生懸命演じる、そのことでみなさんに元氣や勇氣を届けられたらと思います。

—— 全労済セイフティ・ファミリー—— 新年号

年が明けて間もない一月八日(土)は静岡新聞と毎日新聞に中川根町出身で東京で活躍している松永憲生さんと、町内で活躍されている板谷信さんが大きく載りきった。ご紹介します。

戦後還暦 われら憲法世代(7)

ノンフィクション作家 松永憲生さん

中川根町久保尾出身 昭和二十二年生まれ

「汚れた社会」に憤り

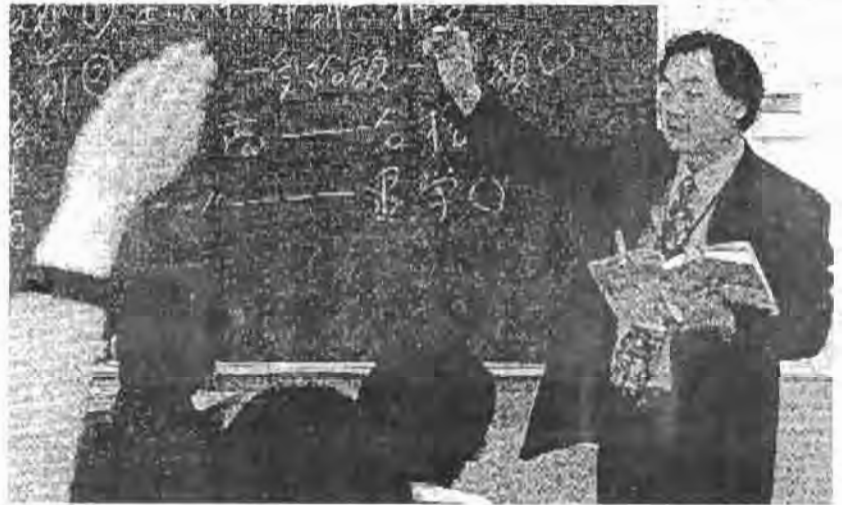
人権思想心に共鳴、えん罪を追及

「さて問題。公務員の世界で出世するための三原則は何か。東京都内の福祉専門学校。行政処分の法的根拠を扱う講義の終盤、法学講師でジャーナリストの松永憲生さん(五七)は学生に水を向けた。「ある課長さんは、遅れず、休まず、働かずと言うんですね。働かずは出世できない。」

駅前自転車問題を解決するため法改正に奔走する公務員が、企業や政治家に行く手を阻まれ、やがて左遷の憂き目に遭う。臨場感あふれる語り口に、学生の私語は鳴りを潜めた。栄転目当てに仕事を投げては本末転倒。「公務員を目指す人。しっかり働きなさいよ。」

「このつぶれた葉を見ろ。お前、これで生きているんだぞ。当時七歳。友達と遊んで畑を荒らし回った日、中川根で茶農家を営む父の怒号が響いた。「大人は必死で生活しているんだら。涙が肌身にしみた。」

もう一つ涙の思い出がある。中学生のころ、勤め先でストを主導し、世の矛盾と闘っていたいとこが自殺した。彼との親交



は、世間を知る無二の手掛かりだった。喪失感に「汚れた大人社会」への憤りに転じた。

駒沢大で憲法を学び、人権思想に共鳴した。ベトナム反戦デモを行った上級生を退学処分とした大学当局に反発。授業放棄を提起し、処分撤回を勝ち取った。

大学卒業後、通信社を経てフリーランスに。自民党本部、炎上事件などのえん罪事件、裁判官や弁護士の間着ルポなど法曹界の内幕を中心に、雑誌や単行本に書き連ねてきた。

独立後最初の仕事は、大森初銀事件の法廷ルポ。強盗殺人罪で起訴された被告は無実を主張した。一審無期懲役の有罪判決を受け、被告は「しらけちゃった」とぼつり。怒りの発言を予期した取材者の先入観は、粉々に打ち砕かれた。

「これは本当に無実かもしれない。本気で事実を訴えたからこそ、さうりと言えた言葉だ。直感の正しさは、最高裁の無罪判決で証明された。「人間の内面の豊かさを感じた時、先入観抜きで取材する姿勢が真相を見いだす」と確信した。

だが、えん罪事件は後を絶たない。判決を言い渡す側

の裁判官を取材すると、真実と格闘し苦悩する姿よりも、裁判
処理件数の成績に一喜一憂する『サラリーマン』の側面が浮か
び上がった。

そんな「戦後の人権危機」を描写するため、故遠藤誠弁護
士に迫った。時に暴力団や宗教団体の弁護も引き受け、その
先の市民の権利を守ろうとした遠藤氏の生き方を通じ
「厳しい自己責任と表裏一体にある人権の本質」を表現し
た。

三十年間「死に物狂いで生きる人々」を見つめた。次の題材
は『縄文時代の平和社会』。自然な共同体が抗争を生まな
かったのはなぜか。川根の牧歌的な暮らしに思いをはせつつ、
理想郷の探究を続ける。

平成十七年一月八日 静岡新聞より

ともに生きて、しずおか水物語(7)

住民グループ代表 板谷 信さん

中川根町地名在任 五十四歳

|| 住民の手で水力発電復活 ||

— 先人が残した水路生かし

規模拡大し地域振興に —

低い山々が鳥が羽ばたくように連なり、その合間を川が蛇のよ
うにうねって進む。大井川中流に位置する中川根町地名地区。
いつのころからか「鶴山の七曲がり」と名付けられ、今でも住民
の間で使われている。

地区の両端を直線で結べば3km余だが、川の流れば13km



水路近くに建てられた水力発電小屋からは絶え間なく水が
流れ出ている

を握りながら教えてくれた。洋風ルネサンス式の建物は威厳
あるたにすまいだが、後世に残すには相応の費用が必要に
なる。「いずれ何とかしなきゃと思うんですよ。でも費用が
ない」と板谷さんは苦笑いした。

地名地区では、二〇〇三年十二月に住民たちが手作りで水
力発電所を復活させた。人口は七〇〇人足らず。そんな地
区で地名発電所の休止以来、約四十年ぶりとなる復活の
中心になったのが、地域振興を目指し板谷さんらが結成し
た「地名の平」だ。発電後しばし活動を休んでいたが、二〇〇
三年九月から活動を再開し、最初に取り組んだのが水力
発電だった。

住民たちが設けた発電所は地名発電所跡から約二〇〇
メートルの位置にある。小さな小屋は発電所のイメージには
ほど遠いが、24時間休まず発電を続ける。小屋の裏にあ
るうづそうとした木立の斜面を登ると、板谷さんが指さ
す先には大井川の水を引いた幅1mほどの水路があった。

にも及ぶ。水力発電をするには、こ
うした川のうねりに加え、高低差
があることが最適で、かつてはここに
県内最古級の発電所があった。東
海納料(現・東海バルブ)が自家発
電用に一九一〇年に運転を始めた
地名発電所。今は赤れんが造り
の建物がひっそりとたたずむだ
けだ。

「この建物は歴史的価値がある
そうですよ。」地元で町議を務め
る板谷信さんが愛車のハンドル

「水力発電ができるのも先祖が残したこの遺産のおかげなんです。水路は明治初期の一八七〇年(明治十二年)から一八七三年(明治六年)に造られた。芋や雑穀を主食とし、貧しい者は裕福な家の田んぼへ行つて収穫の際に落ちた穂を拾って飢えをしのぐ。そんな暮らしから何とか抜け出した住人たちの願いを担い、まだ若い二人のリーダーが引いた水路は約20㍔の水田を生み出した。

農民たちが私財を出し合った用水路は47㍔のトンネルと約4㍔の水路からなる。そして引かれた大井川の水は田畑を潤し、料理や洗濯など日々の生活にも重要な役割を果たして来た。コメ余りの世の中とあって現在では減反されたが、地名地区は山間地の同町では唯一残る稲作地帯となっている。三倉仲四郎と椎野作之八、水路を造った二人のリーダーの名は今も地名で語り継がれている。

発電は、高低差4.5㍔を流れ落ちる水の勢いを使ってモーターを回す。モーターは業者から購入したが、それ以外はすべて住民たちの手作りでした。設置にあたって岐阜県久瀬村の民宿に設置されているものを視察して参考にした。最高出力は300W。地名発電所には到底及ばないが、付近に新設した四つの街灯に電力を常に供給し続けている。

「またまた実験段階。もっと規模を拡大し、どんな利用法があるかアイデアを募って、地名にもっと元気が出るようにしたいんですよ。」先人が生み出した水田を見つめながら、板谷さんは誇らしげにつぶやいた。

平成十七年一月八日、毎日新聞より

我がふる里 上長尾の思い出(昭和二十年代)

藤枝市 中西一己

◎初めてみる上長尾

昭和二十年八月、小学校三年の時、父親の転勤で千頭から中部配電上長尾散宿所へ行く事になった。

千頭駅から大井川鉄道の貨車に荷物を乗せ、田野口駅で下車。荷物の運搬は吊橋(中橋)はとて無理との事から渡船で行く事になった。

田野口駅の下の方岸から船出して、梅野屋旅館付近に着いたが、どのような船着き場かあまり記憶にない。

当時の大井川は水量も多く、結構船で行来していたように思う。上長尾の船着き場で荷物をりやかりに積んでおくと、なせか朝鮮の子供達が多勢来て手伝ってくれた。

荷物を積み終るとりやかりと押してくる。長尾川橋を渡り、駐在所の横を通り、少し坂を登った所の右手に学校の教員官舎、小学校、忠魂碑、役場前を通

って小川えん宅、消防火の見櫓(観覧所)藤井えん宅前を通り、これから住居とする。中部配電上長尾散宿所へ着きました。現在の高郷集会所のところです。この場所は高台にあり、とても見晴がよく、田んぼが前に広がっていて、とてもすばらしい所というのか、第一印象でした。

この地で昭和二十年八月(小学三年)から、昭和二十六年三月(中学二年)までの五年七月、多感な少年時代を過ごした。

◎上長尾散宿所の周辺



中部配電上長尾散宿所の任務は、電気の普及、建設、保守等の営業内容で、大井川水系には何箇所かの散宿所が配置されていた。現在の中部電力㈱の前身である。

当時の電気事情はとても悪く、またランプ生活を行っていた地域もあった。又、電気が通じている地域でも、お茶の時期にはよく停電し、父親は尾呂久保、八中、梅高等飛びまわって修理していた記憶がある。それは配電線が現在のようには銅線ではなく鉄線で抵抗が高い。製茶機械が一斉に動き出すと、電圧が下って停止してしまつた、と思われる。

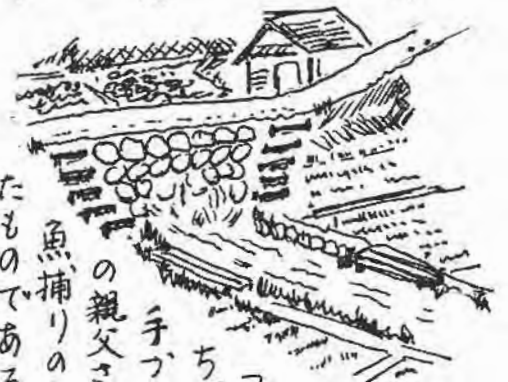
戦後間もないこの頃は、物資も少なく電球が切れると切れた電球を持参して新しい電球との物々交換。現在のように家電店で何でも買える時代ではなかつた。

この電球の交換も散宿所の仕事の一つでもあった。この散宿所は高台のため見晴しが非尚中に良く、前方に大井川、広々とした田んぼと、そして道路が一望できた。

散宿所から見ると、左に小澤医院、すぐ下に植田さん宅、散宿所前の道路はだらけと下り、下り切った所に松島さん宅、その横からわさび沢が二枚つづき、そこにはヤマメが泳いでいた。

わさび沢の少し高台になつたところ、井林さん宅、もう少し下ると建具屋さん宅、家も少なくなつたりとした感じで、とてもすてきな田園風景である。

松島さん宅前の道路を歩いた田んぼ側、とてもすてきな湧き水があった。私の日課はその水を飲料水として使うために、家まで何回も運ぶ事であったが、冬場はとてもつらく思つた。その湧き水は、夏はとても冷たく、近所の



人々がスイカ、きゅうめん等よく冷やしていた。又、冬はとても暖かい。この水が田んぼへと流れてやがて堀をつくった。堀にはフナなど沢山の魚たちがいちた。この魚を堀の穴に手を入れ手づかみでよく捕つたものである。近所の親父さん(小澤太造さん)から手づかみの魚捕りの名人と言われて得意顔をしていたものである。又、夏の夜にはカンテラを使って夜漁りを行ない、ウナギ、ドジョウ等沢山とれた。その他田んぼにはいなごもいた。

このような風景も今では一変し、散宿所は高郷集会所に、消防火の見櫓は、役場になつた後、現在は在宅介護支援センターに、田んぼは家並みが続き、昭和二十年代からは想像出来ない位りの変わりようである。

丁度この頃は、戦地からの引揚者も多く、外地で苦勞した満蒙開拓団の方々を、日の丸の小旗を持って、吊橋のところまで出迎えたりした。又、現在のNTT中川根局付近の道路が、大洪水のため削り取られ、忠魂碑の木を切り倒して防ぐなどした村の人達の姿や、学校の校庭と付近の茶畑からは、縄文時代の土器が出土した。私のその一部を拾い、タンスの中に入れて大切に保管していたら、母親から大目玉をもらった事、その他、この校庭には、プロ野球選手、国鉄スワローズの北川投手が来て指導をしてくれたりした。ノックすると茶畑まで飛び出すなど、いろいろな事が思い出される。

🌸 学校の先生がた

当時の先生は印象としてとても個性豊かな先生が多かったと記憶している。

上長尾小学校では、親子二代にわたり教えていた。たまたまた又平校長先生、私のイタスラのもとで、母親が校長室に呼び出されたりした。教頭の増田先生、乾パンのあたながあった。音楽の久野先生、担任の薬科先生は運動会の時に、模範演技として蟹バサミ形の高跳び、初めて見る跳躍に父兄も拍手喝采、メートル六ロセンチくらい飛んだのではないかと思う。

又、高畑智先生が教員実習生として教壇に立った。この頃は治安も悪く、浜松で暴力団の発砲事件があり、「明日から警察官になる」と言ってお先生をやめ、教壇を去った鈴木先生等々である。

中川根中学校は昭和二十四年の入学である。前川校長先生を初めユニークな先生方であった。高畑先生が中学校の先生となっており、教え方が抜群、チョイスこと英語の小泉先生、担任の高木直子先生は、読み聞かせの授業、「秘密の花園」樂しみの一つの授業であった。

中学二年の時だったろうか、久野脇の美人下級生へのラブレター事件、私が出した憶えはないが、どういいう訳か私の名が……。職員室に呼ばれ叱られた思い出等、このラブレター、誰れが出したのか、今だにわからない。

中学三年に父の転勤で中川根村藤川へ、同級生と別れるの、かいやで、藤川から中川根中学校への通学となった。朝七時前に家を出、自転車も坂が多いため半分は使用できない、この一年はとてつらい通学となった。水川までは友達がいるもあと一人、特に高校受験のため

め補講授業があった時は、二食弁当持参で参加、帰りは夜九時頃になった。山道はとて細く……。それでも藤川から役場に通っていたお姉さんがいて、何んとなく頼りにしていた記憶がある。そんな苦しい通学の時やさしく声を掛けてくれた新井先生と岡村先生、力強く思ったものである。

いずれにしても小学校・中学校を通して、良い先生方に恵まれたものである。

大井ハム会堂

年に数回川根路へ上る。四季の里で一服して出掛けると、すぐに、左側に大井公会堂がある。当時は川根路一番の芸能文化の殿堂であったと思っっている。多勢の芸能人が来演するなど、栄華をきわめていたが、今はその面影すらない。

学校の映画観賞として見た三益愛子の「母三人」。来演した一流の芸能人、記憶しているだけでもすごい人達である。東海林太郎・岡晴夫・近江俊郎・津村謙・伊藤久雄・田端義夫・楠木繁夫・若山彰・青木光一・若原一郎・白根一男・女性芸能人も多数、市丸音丸・高峰三枝子・大国阿子・渡辺はま子・二葉あき子・織井滋子・浪曲界では東中軒雲工門・広沢虎三・相模太郎等の方々です。いかにすごいお解りいただけるとは思いません。

このついでに芸能人の招聘に努めたのが、魚六の親父さんと記憶している。この公演を支える裏方も大変だったようです。当時は電気事情もよくない時代、舞台裏では私の父達が照明効果を上げるため、スライダックを

使い、明るくしたり暗くしたり、又投光器に色付きのセロハンを貼り、赤・黄・緑にしたり、いろいろ工夫して出演者をもりたてていた。

テレビのなかった時代である。この大井公会堂で当時の人々が感動し、明日への活力と希望をつなぐ場であったと思います。

将来、二、三百年後か、いや千年後か、このふる里に、大井川の水が満々と流れ、高台に高級マンション、眼下には田園風景が広がり、文化の殿堂大井公会堂の復活する事を夢みつつ、そして間もなく行なわれる、ふる里の合併に幸あれと祈り、小生が過ごした多感な少年時代の思い出を記してみました。幾つかの記憶違いがあったかも知れないが、悪からずお許し下さい。



なお、三月十三日、中川根中学校二十七年九十業の同級会が「つま恋心」にて開催予定、童心にかえり、ふる里を大いに語りあいたいと思っております。
(編集室より)

◎文中、藤川から役場へ通っていたお姉さんは高野昌子先生
新井先生は高畑波子先生
ではないかと思えます

◎写真は対岸より見た高郷地区の十数年前の姿、そして現在は、また変化しています。

林左馬衛先生のこと

山田新市

去年の八月、和歌山県の田辺市に移り住んですぐ、県の日刊紙である「紀伊民報」に「紀州茶話三昧」の連載を始めた。毎週水曜日掲載の約束だが、意図したのは茶の歴史研究では死んでもある紀伊半島から日本の茶の歴史を見直してみる、とだった。荒唐無稽な茶産地伝承などの分析を終え、今、ようやく茶の歴史そのものを真正面から取り上げるところ。全体のおよそ三分の一、四十回目まできたところである。

昨年の暮れ、連載はまだほんの取っかかりだったが、年内掲載の八回分ほどをコピーし、年末のご挨拶として、れんこんで何人かの方にお送りしたり、今年に入って、そのうちの一人、林左馬衛先生から、「まとめてござんしよ」という先生の連載稿の分厚いコピーとともにお手紙をいただいた。そこには、きみのいいところは教科書どおりにものを考えないこととだが、そうなるら全部自分で書かなければならないことになつてしんどいから、紀州から歴史を見直そうという試みは貴重だし、その努力はきつといつかは実るにちがいない、とあった。

左馬衛先生とは、もう二十余年余り前、先生がまだ皇居の内にあった宮内庁書陵部に在籍されていたころからの縁だ。『日本のお茶』という出版企画が実現し、その一冊で一度お目にかかりたいという私の電話を快諾され、「門内に入ると手続きがうるさいから、夕方六時に門の外で待っていなさい」と言われた。一杯やりながら話そうという言外のお誘いであ

ることは言うまでもないが、約束の時間、先生はご自身の著書『茶道史の散歩道』と『茶道の文明史』の二冊を小脇に抱えて飄々として現れた。

お茶の本を作るなんて、おやめなさいよ。それが先生から最初に言われたことだった。お茶の世界はね、一度入ったら抜けられません。だからおやめなさい、というのである。

『日本のお茶』というタイトルで(株)ぎょうせい、のら上梓した私の編集企画は、その数年前に世を去った故郷の父への供養のつもりで立案したものだった。その企画は、当時静岡薬科大学にいらした林栄一さん、果茶業試験場長だった大石貞男さん、そして中央公論社から『茶の世界史』を出されたばかりの角山栄先生らの協力をいただいていた。ぶん日本初の本格的な全書となったが、なぜかそこに左馬衛先生のお名前はない。初めてお目にかかった時の言葉のせいではないのはもちろんだが、なぜだったのだろうか。

お互いを忘れてしまったような十年あまりが過ぎて、一九九九年の六月、前年にラ・テール出版局という小さな本屋から上梓した私の著書『日本喫茶世界の成立』が財団法人三徳庵の『茶道文化学術奨励賞』をいただいたことになったとき、私は一橋にある学士会館の一室で左馬衛先生とほんとうに久しぶりでお会いした。先生はこの賞の選考委員の一人だったのである。

覚えていてくださいますか、と私がお挨拶すると、ああ、覚えてるよと、あの飄々乎とした白髪の種類で、いっこつとされた。私の著書は、言うまでもないことだが、いわば一種異端の書である。世間通用の茶の歴史に関する諸説へのアンチテーゼを、『拙の茶』と名づけた後説とともに提出したものであったからである。

ちょっと場違いだが、いくつもの点にわたるそのアンチテーゼの主なものに記すと、日本の茶は平安京に遷都して二十年ほど後に、正史の記録に現れるが、それ以前の茶へのアプローチを抜きにして、いきなり中国の茶の歴史と短絡するのは学問の方法として、それとは違うアプローチを果たすための方法だったが、その後、私は『正倉院文庫』に頻出する『茶』という蔬菜の分析から、奈良時代以前にも茶があった可能性を指摘する一方で、じつは『茶』という文字は鎌倉時代の栄西の時代になって初めて使われたことをも知ることになる。茶の歴史の闇はそこに秘められていると言ってよい。

歴史の闇といえは、茶には他にもある。たとえは茶筌は、中国宋代の茶書『大観茶論』に『茶筌』と記されたものが最初で、それがいつの時代にか日本に伝来したとされるのが通例である。しかし実際には鎌倉時代の初めにはすでに晩茶を茶筌で泡立てて飲む習慣があったことを示す文献があり、しかもその茶筌は『大観茶論』に登場する『茶筌』とは別の、獅子鼻などの古舞踊に使われる籠かごに発するものだったらしいと考えられることがある。これをわざわざ『茶筌』という言葉を使っているのは、柳田国男やその他の人たちが言っているように、茶筌がハチャセン／ハササラなどと呼ばれた被差別民と不可分のものだったらしいことが知られているからである。今、これ以上くわしく書くわけにはいかないが、同じようなことは『晩茶』にも、いや、それどころか、茶そのものについても言えるに違いないことは、延喜式などを見れば察せられることもある。

その後、左馬衛先生とは、毎年六月に挙行される茶

道文化学術賞の授賞式でお会いするほか、教度もの長文の手紙の往復で意見の交換をさせていた。だいてき保存しているが、右に要約して述べた私のアンチテーゼの展開もこの手紙の往復の中で温めてきたものである。

目下推談を繰り返している「喫茶史論ノート」五百枚はまた出版を引き受けてくれるところも決まっていないうが、「喫茶論」「茶筌考」「伝承論」などの各論を、本論「喫茶史論の視点」とともに収めることになる。ともかくもそれが本にならば、私は、もっと新しい世界、文学と茶の結びついた世界へ出て行ってみたいと思う。左馬衛先生とともに、もっとも多くの示唆をあたえてくれた堺市博物館の角山榮先生についてもかくつもりだったが、紙数が増えそうだから、いつか機会があったらこのことにさせていた。だく。

中川根町出身 田辺市在住

東京のかたすみから(43)

テレビの始めから終りまで

オリンピックと戦争

渡邊 實夫

今年の夏はこのほか暑かったが、私はアテネオリンピックを見るために十七日間、夜通し起きていた。

未だご記憶の方もあると思うが、今回のアテネオリンピックでは放送中、「モスクワオリンピックが中断して以来……」のアナウンスコメントが何度も何度も度々。私はモスクワオリンピック中断……を聴く度に思い出すことがある。

(3) 昭和52年(1977年)4月9日(土曜日)

在職中の昭和五十二年二月、編成局会議で、朝日新聞出身のやり手の三浦甲子(おし)三常務取締役編成局長が、「国民の受信料で巨大組織になったNHKだけが、重大な国家行事(例えばオリンピック)を放送するのはおかし。また、受信料もNHKのためだけでなく、放送事業全体の将来のために有効に使われるべきだ」と述べた。これを聴いていた私は、何か起りそうだな、と予感した。

それから間もなくのこと、昭和五十二年三月十日、「モスクワオリンピックの放送権をテレビ朝日が独占」と大々的なニュースとして報じられたのである。さすが三浦さん、「やった、やった」と社内は大いに沸いた。

五輪放送独占を追及
参院 決算委

契約草案は国辱的

法律など一切無視 下村氏

テレビ朝日(以下、朝日)は、NHKとオリンピック放送権に関する契約草案を、法律など一切無視して、強行しようとしている。下村氏が、この草案を「国辱的」として、参議院決算委員会に追及した。草案は、NHKがオリンピック放送権を独占し、朝日は、NHKから事前から事前から、日本の放送機関に、対し、オリンピックの放送権及び放送権



下村氏

料などの協議について要請があった。しかしNHKはモスクワオリンピックも当然自社にくるものと、悠長に構え、対応がぐずっていた。

しかしテレビ朝日の三浦さんは、「先般の編成局会議で

のべた持論実現のチャンスと放送種料を用意してモスクワに乗り込み、親ソ的な朝日新聞をバックに、ソ連首脳と直接折衝して、独占契約をとったのである。

しかし、これに関連してテレビ朝日は、国会審議に参考人として招致されて説明を求められたり、NHKほか各社から中傷されたりした。

そこでテレビ朝日は「自由競争の原則にのっとって正当な手続を経て締結したものである……」の協定書を公表して、放送界の議論は収束の方向に向かった。



→「モスクワオリンピック放送権の調印式」
「協定書」写真提供。杜史より↓

日本の国内は、テレビ朝日の独占放送で収まったが、好事魔多しの例えの通り、間もなく海外で、オリンピック精神の根幹に関わる事件が発生し、オリンピックの行方が危ぶまれた。

主権国のソ連が戦争を始めたのである。そもそもオリンピック精神と

は、一時的にでも争いを止めて、世界が一つになって、スポーツの祭典をしようという事で始まった……。そのオリンピック精神が破壊されたのである。

事の起りは、昭和五十四年十二月二十七日、アフガニスタンに軍事クーデターが発生し、そこからソ連が軍事介入して侵攻したのであった。

アメリカのカーター大統領は、対ソ非難声明を出し、アメリカを中心とした日本、西ドイツなど自由主義国のオリンピックボイコット運動が始まった。

しかしながら、モスクワオリンピックは、モスクワまでやってきたフランスやイタリヤなど七か国が、入場行進を拒否して抗議の姿勢を表したものの、少数国参加で予定通り開催された。

折角放送権を獲得したにもかかわらず、テレビ朝日は、このような社会情勢のために、国際世論を配慮して、放送時間を当初の五分の一に縮小せざるを得なかった。

話は遙か遡るが、日清日露戦争を勝ち抜いた日本帝国は、国際舞台に躍り出て、昭和十五年のオリンピックを東京で開催する決議を得た。

会場に入れない観衆にはテレビで見せたいと、恩師高柳健次郎先生をリーダーとした浜松のテレビ研究集団（静岡大学工学部の先輩たち）が、東京のNHK技術研究所に合流し、中継車まで製作して準備をした。

協定書
次ページ上段写真に先輩たちが試作した六十五年前の東京オリンピック用テレビ中継車





昭和二十年八月十五日、日本は戦いに破れ、アメリカに無条件降服したのである。

しかし左様に平和の祭典オリリンピックと言えは、私は戦争を思い出すのである。

二〇〇四年十一月十日記

参考文献・テレビ朝日社史
・読売新聞

しかし、やがて支那事変（日本対中国の戦争）が激しさを増し、大東亜戦争（太平洋戦争）勃発前夜を迎え、東京オリリンピックは中止の止むなきに至った。

その後、時代に流されてテレビの研究は中断され、代わりに夜中でも敵が見える暗視管（ナイトビジョン）の研究開発に入った。

揚げ句の果て、浜松の研究所は、遠州中田島沖からの敵の艦砲射撃で焼け野原と化した。

編集室より

渡邊さん同様、アテネオリンピックに熱中して、睡眠不足におちいった方々が多かったらうと想像しています。それほどに日本選手の活躍がすばらしいかったですね。

競泳・体操・陸上・柔道・レスリング等々、今もあのシーンが脳裏に焼き付いています。特に強いく平泳ぎの北島選手・体操男子の団体金メダル・女子マラソンの野口選手と与えてくれた熱い感動・等々。閏年に行われるオリンピック。次回は北京との事、どんな感動が待っているのでしょうか。近い様な遥か先の様な四年後ですね。

モスクワオリンピック・ボイコットの時も、もう二十四年前の事なのですね。第一次オイルショックも、国全体が活力があったから、ぬけ出し、偽りの高景気バブルに向かってひた走りに走っていた時代だった様に思われます。

あの頃、世界の頂点に立っていたバレーボール。それから世界中の国々が強くなり、今ではメダルはおろか、出場権さえむずかしいほど低迷している。柔道の山下選手、マラソンの瀬古選手など、今が最高のコンディションの選手も、さぞ出場したかったらうとは、当時不運を気の毒に思ったものでした。

昭和十五年頃の東京オリンピックが取りやめになった事は史実として知っておりましたが、それにしても、昭和十余年、浜松のテレビ研究集団が活躍してオリリンピックの中継を計画していた事は、全く知らない事でした。静岡県民として誇りに思う次第です。ノクトビジョンも初耳でした。金谷の牛尾山に殺人光線（レーザー）基地があったという……ふと思ひ出しました。

残したい「元藤川」の名称

高本 鷹一 (89歳)

大宝元年(七〇二)大宝令により、古代国家の官僚機構が成立した。併しこれ等の制度は、地方財政に大きく影響を及ぼし、国家財政変質の中、転換を迫られた王族貴族の生活基盤を補足したのが、私大土地所有の荘園であった。

藤原郡誌によると「文武(六九七)元明(七〇七)両帝の時、詔して王公諸臣に土地を賜る、これ荘園の源なり」とある。果史年表によると、元慶五年(八八二)遠江国磐田郡を割いて山香郡を置く」とある。

町史によると、山香荘の領家(荘園主)は後白河法皇(一一五八)であり、崩御後皇女宣陽門院を経て、文永四年(一一六七)後深草上皇に伝領された」とある。

日本紀略によると「南北朝争乱の時に到り、皇族の特に此の僻地に來りて、根據を造り、兵を集め自ら縁由の地を求めて、義政を糾合せられたるものと思われ」とある。

延暦二十二年(八〇三)桓武天皇より奥州征伐の命を受けた坂上田村麿は、数万の兵を率いて現在の宮城県を平定し、延暦二十三年(八〇四)凱旋した。

この奥州平定に従軍した京都御所守護の副長官藤原左衛門佐は、途中田村将軍に別れを告げ、一族を従えて京丸に隠栖した」とある。

周智郡誌(小股京丸の項に、「古老曰く、昔、乱世の時、京人藤原左衛門佐者臣僕隊伍共、蟄居、木器を造つて世業となす云々」とあり、「何かの因縁とする処な

かるべきか」とある。

隠栖を続けし藤原一族は、やがて新天地を求めて杉沢(天竜川水系氣田川支流最上流部)を越え、松尾・長野を経て長尾川を越え、尾呂久保に至り、水川河内を渡り、大井川沿いに広大な平地を発見、これぞ「藤原の里」と定め、移住を始めた。やがて此の地に藤原一族のものたらした京文化が栄え、対岸南北に広がって行ったものと考えられる。

古文書によれば、延喜十二年(九一三)大井神社が創設されたとあり、平安時代の末期より集落共同体としての村が形を造られ、お宮の祭等も行われていた。承久元年(一一九)鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮で源実朝が殺害され、好機到来と藤原の残党は、後鳥羽上皇を扇動して、北条義時追討の院宣を下させるが、上皇側に着く、武士は少なく、遂に北条氏の軍門に屈伏し承久の乱は終る。

この承久の乱の主謀者であった藤原兄弟は捕えられ、藤原光親は菅坂で、弟藤原宗行は蓋沢で夫々処刑された。

この承久の乱の功績により、伊豆の天野兄弟が遠州を拝領し固入した。初代犬居城主天野経顕、初代秋葉城主天野影顕が着任し、此の地方も天野氏の配下となりたる為、急遽「藤原」の地名を忌みて、「藤川」と改称したものと推測される。

郡誌第一編風土記伝山香郡図の記入に次の様な項がある。「藤原・長尾等諸村、至徳(一一三三)・応永(一一三九)年間、古證文書山香荘にあり」として其の藤原と稱するは、今の藤川を指したるもの如し、又、藤

原東大井川に流入する川は藤原なる地域を流れる川なるが故に藤川と称す。遂には土地の名もこれにより自然省略に従われたか、或は往時の領家等の關係上故に藤原を忌みたるものもあり「か云々」とある。

藤原殘党討伐の功績により遠州入りした天野氏に對し、身を守る為には、藤原に關する一切の証拠物件を隠滅する必要に迫られ、近郷の藤原勢力の及びたる処、皆これに倣つたと伝えられる。

其の後、南北朝の動乱により、今川仲秋が一時遠江を領せし事は、大日本史にも明瞭である。心永六年(一三九九)今川仲秋が藤川村を兵糧所として、天野近江入道に、その支配を任せたとあり、此頃始めて藤川村の字名が出てくる。従つて藤原を藤川に改稱したのは六百年以前と云う事になる。

隠滅された証拠の中で、現在僅かに名残りも留めて置けるものは、大井神社の御神体である。藤原吉重名入りの鏡と、大頭竜社御神体の藤原姓入りの鏡、及び、平安時代より文書、文書空白時代を経て、僅かに古老の口碑により伝承された「藤原の里」であった。因みに現在藤川区の旧家八十二戸中、藤に因んだ家紋が二十九戸あるのも何かの縁りを感じる次第である。

今回町合併により同字名の多々ある中で「元藤川」として未永く昔話を語り継ぎたいと念願する次第である。

又々々高本さんの健筆をお届けできてうれしく思います。寄せられた便箋に流れる様な美しい文字を見る時、高本さんの歩いて来られた、蛍雪の年輪が浮かびあがります。

中川根の屋号 その一

明治の初期、この中川根でも、一般住民に姓を名乗ることが許されたとき、それまで、昔から呼び慣れてきた屋号や地名などを姓とした家は、五指にも達しないと思われまふ。それ以前に、その家の固有の名称として存在した屋号は、たぶん、その家が建てられ、または、分家などができたとき、初めて名付けられたものでしょう。

屋号について中川根の特徴をあげますと、圧倒的に多いのが「〇〇衛門」です。従つて屋号を姓として用いるのは不適当と思われたのでしょうか。

この「衛門」の始りは、禁裏守護の武士に冠した役職名で「大室令」により、皇極天皇四年(六四五)衛門府が設置された後、かなり紆余曲折があつて、弘仁二年(八二二)左右、衛門府が置かれていました。

その構成メンバーは、左衛門府を例にとると、長官より左衛門督一名、次官より左衛門佐一名、その部下に大尉・小尉という尉と稱するもの各二名があり、その外大志・小志・醫師・門部など、物部を含む総勢二五口名前後です。督・佐・尉は、それぞれ、その階級を示す呼称で、右衛門府も同様の構成となつていました。これが後世、武家社会全般に展開することになりましたが、その因となつたものは、弘仁期において、地方における国家権力の衰退に對し、警固使・追捕使などとして、地方に派遣されるようになり、特に衛門府を中核として、檢非違使庁が成立し、中央における警固・追捕の職務を一手に掌握するようになってからは、地方への駐留も、逐次、恒常化していったものと推定されます。

この種の屋号は、ひとりで中川根にとどまらず、北部駿河遠州

の山地一帯に分布しておりますが、その要因は、主として中世以降の戦乱による分化と推定され、古代のそれをも同様とすることは、(大室令がらの左右衛門府云々)ゆながらず疑問があるように思われます。しかし、否定的な確証もありませんので、一応、源平の戦も含めて、史上大乱とされるものだけみても、「南北朝争乱」があり、「応仁文明乱」から、ずるずると「戦国時代」に入って、最終的には「関ヶ原合戦」となりますが、当然それによっておこる土豪国人の興亡は、いずれも敗者が、この山中に隠棲の場を求めるところによって、幾つかの戦乱の積みかさねが、必然的に「衛門」の屋号の増加につながったものと判断されます。

その中には、徳川家康との抗争に敗れた、武田の臣があり、久野西に平和な城下をもちながら、衆寡敵せず、山中に悲運をのこった一族。更には北条氏の滅亡と共に消えた家臣団も、町内に所領地の伝承されていたことすらしても無縁ではあり得ない。また、甲斐・信濃から山越えに、大井川・安倍川の上流部に入り、時代と共に南下して、やがて町内北部に達し、集落形成の先駆となった。また、南北朝期には、天台宗智満寺、天台宗大泉院が、この寺社の渦中に在って、安倍城の狩野氏、徳山城の土岐氏らと共に南朝に与り、特に智満寺は、直接僧兵らが参戦となり、敗れて、島田大津を逃れ、上長尾に隠棲するが、その後家臣の動静は明らかでない。しかし、寺院建立が可能であったことから推定すれば、徳山城の没落も含めて、全部が全部逃散したとは思えない。かなり多くの人達が土着したのではないだろうか。

それから、少数ですが、「太夫」があります。これに特別な意味があったかどうかは判りませんが、「能」とか「謡曲」或は「猿樂」などを神前に奉納した特殊な家柄であったか、或いは神職そのものであったのか、三、三の例からすると、なにか神社に関係あったかもしれません。

尚、これは一般論になります。聊か残念に思うことは、「衛門」にしろ、「太夫」にしろ、これらの殆んどが、たぶん、当初文字を知っていた、貴重な文化人的存在であったと推定されますが、時代と共にその知識を失い、すでに戦国期後半の頃には、自家の記録も存在せず、この点に関する限り、不毛地帯という感じ。従って江戸期に入ってから、大方は村役衆の手に依って諸件の文書化がなされていったようです。勿論、長い歳月ですから、その間、火災などの不可抗力も考えられ、併せて、伝来の古記録などの焼失も避けられず、特に山間地の、このような地域に限って、消滅能力は無い等しかったと思われ、すから、しかたのない事だと云うべきでしょうか。

以下 74号に続きます

★73号、昨年九月ごろからの寄稿と、新年号が、ミックスした発行となりました。74号もすぐ取りかかります。東海地震のことも、中川根のルーツ「屋号」など、お待ち下さい。

＝定期購読のお願い＝

中川根ふる里通信は有料発行です。

1部 年4回 200円

皆様の定期購読が、ふる里通信の発行を支えます。基本は年4回の発行ですが、中川根町名があるうちに80号まで発刊したいと考えています。合併後も「中川根ふる里通信」の名前は変えず、年4回のペースで発行する予定です。

購読料が切れた方には、振替用紙を同封致しますから、引き続き、ご購読いただきたく願います。

もしも、購読を止めたい時や、住所変更のおりも是非、ご連絡下さい。

郵便振替通知番号

00870-4-81556

発行責任者 428-0319

静岡県榛原郡中川根町上長尾859-6

小沢節子 TEL 0547-56-0015